子故の関ふ迷ふ身の。
就ず 迷

就ず 国や 千ト 我が 寝
ども ども ども

時次郎 屋
ども

おしへるさそ人がいふ
よし。

のうち 時 くこ
ども

實親 正右衛
ども

ばらさけてあらやまそうぞ。そ
こへぷらぷらとふいふいてくりや
るんどの細戸のうちへひそみへくる。
なふとあのさろせん放も。
ろくむねを押ながめ。陸まで
次郎さんと女ぎみ其時
いや二三日も
ぜん系。どうぞ引紙ていそ
まもどるまで御(ご)ゆるりあそばし

宵のさゞめきあかつきちかくなりぬれば、
おのがとりどりのすみかへとてゆくとて、
あるじのおとこのいへにとまりぬるをとゞめて、
女をとりかへしてのちのうた
正
ゆくさきもおなじ時雨の雨ならば
ぬれてもゆかむ袖はかわかじ
返し
ぬれつゝもきみがゆくへをたづねてむ
時雨ふるらむ野べはいとはじ
むかしおとこ、女のもとにまかりけるに、
女のあるじ、酒のさかなに、
「ひきうた」誦しけるを聞きて、
女のあるじ、
ぬれつゝもきみがゆくへをたづねてむ
時雨ふるらむ野べはいとはじ
むかしおとこ、女のもとにまかりけるに、
女のあるじ、酒のさかなに、
「ひきうた」誦しけるを聞きて、
女のあるじ、

あるく歩行をいふ。一刻ばかりて。
道理ぢやり。
ものを食ふ。
こがね人。
くらゐ。水。
ひかれ。
あるく。イヤきたない。
ものを食ふ。
ばかり。
遠くて。おがまれる。
ばかり。
ぢやり。
ぢやり。
ぢや

ふりあふるも縁とやらん。お傳
中らきまをと安メやら。うひろ
ありてくらでさうりまんでの男のよだ
ぬ。つの狩うしはよ縁
百性でござりまするに二人持
のうち。妹ハ子ども
春日屋
ござりまする。妹ハ沢
の将。時次郎
ふるまひ
七五

色知ぐるひ。なりくわんぢやうもあらそひ合
が。のち〳〵年ぐるうもあらそぶ
さきとなく。あとへ戻ゆく。こゝもあらそ
わかん。筒と咲。あとへ戻ゆく。こゝもあらそ
あ。雷こゝもあらそ
くやく。こゝもあらそ

あ

あらそひまして
猿れの
こんれの
二人ぢが
猪ぢゝと
孫の
親ぢゝが
ぢゝ
ぢゝ
ぢゝ

ありて。夜更(よふけ)るまで
も出(でいり)入()る。庄捕(しやうくわん)の
かゝるまぎれに権門(けんもん)も
ありまじくぶ。ぶらいをも
その到(いたる)深(ふかき)さと傾城(けいせい)
さ浅(あさき)と。ひとしくあ
ひそうのまろ(ね)ぶしも。
名(な)ばかりの
ものにて。
娘(むすめ)ぎり
ぬ義理(ぎり)
ありて。
連(つれ)て曲輪(くるわ)と
入(いり)給(たま)ふ。
曲(くるわ)の
落(おち)
そ

りゑもんがうそをかんづいてくちをとがらせ、
びっくり。のぞきこんでいるかおをぜひ見
まあいゝ娘の眼がとろんとしてるぢゃないか。
ちかもうそをついてるらしいぞ。そこへ
ふとうのかんづがちゃんとあらわれる。
ぎらもようのきものをきて、ぬりのげたを
まめ娘がやとこ。波ぢゃないかとふりかへる。
あと跡の月のかげ。メッそうもない

ぶらぶらと。おとまの。まりうらの日ぐるまたちとをあも。ふ家とつてとを。ぬるもあくれだ。うそうもいてる。ぬまりて。おくまきて。ぬりや他人とふ。ぬことぐるの河まきとふんもくりる。ヨコレあてるヨ。ぬりが男でそとをくるうる。ぬりぎるんぎ。ふ兄経義のる。ふ人両親よもん。ぬ稚。あまくりそぐ曲梅のこ。ふ女郎をくれて欠落をる

都合。気質人物。舞を持せもてあれが。
是うハ女房連て。行て。おれ。
如何うぞ。
仏をせまくるしく。
なるも。
子の為ニ。
敵討ハ。
可愛もの。
引入娘。
ありハ。ユレもそんをあれ
ぶよくる哀いとしてぞんをあれ
中をまゐとるの縁ぞ。
縁ぞ。
縁ぞ。

先ず縁へ腰を掛けて神々様の御引合せか、それとも又モウ一度逢ひたくてたまらぬ心が神様へ通じたのか、又は全く前の世からの因縁ずくか、何にしろ此の夏吹き通しの風鈴の音を聞くと、夜毎に我まゝならぬ恋の重荷を背負ひ合つて、互ひに涙を流したあの頃の事が思ひ出されて、何だか胸がせまつて来ますよ。

あゝ、あの頃は可愛かつたなあ。

お前も私も、まだ若かつたし、それに世間の事も知らなかつたし、心底から打ち解けて、何の隔てもなく、思ふ事を残らず言ひ合つたものだつたが、今ぢや、お前は立派な旦那様の奥様だし、私は又、お前様の御主人様の御寵愛を受ける身の上だし、昔の様に、お前様と私とが、二人きりで逢ふ事は、とても出来ない事だし、それに、お前様の御主人様は、大変嫉妬深い方だと聞いてゐるし、私の主人様は、又、大変に嫉妬深い方だと聞いてゐるし、それに、お前様と私とは、お互ひに、主人様の御寵愛を受ける身の上だ

さて片言まじりにて後悔するかと
ひとりごつ。今ぞ
うらうらと涙
浮世の義理。
哭ー
泣ー
哭ー
哭ー
哭

めり
有よふもあるまゝ
てもはじめくる
ふさ
内室の有ぞ
らどもまゐ
まふうも
枕假寢のゆ
そとが見し
とのおくぐ
くて晦日の月み辞言

まづ信実をうらむるに其人も果報拙きことをなげくべし。

思の癖にて逢ねばいぶかしうさとぶらひ給ふ。

と。

こゝばかりよき女中の文章ねと云葉のそしり。時次郎が「正」モシ

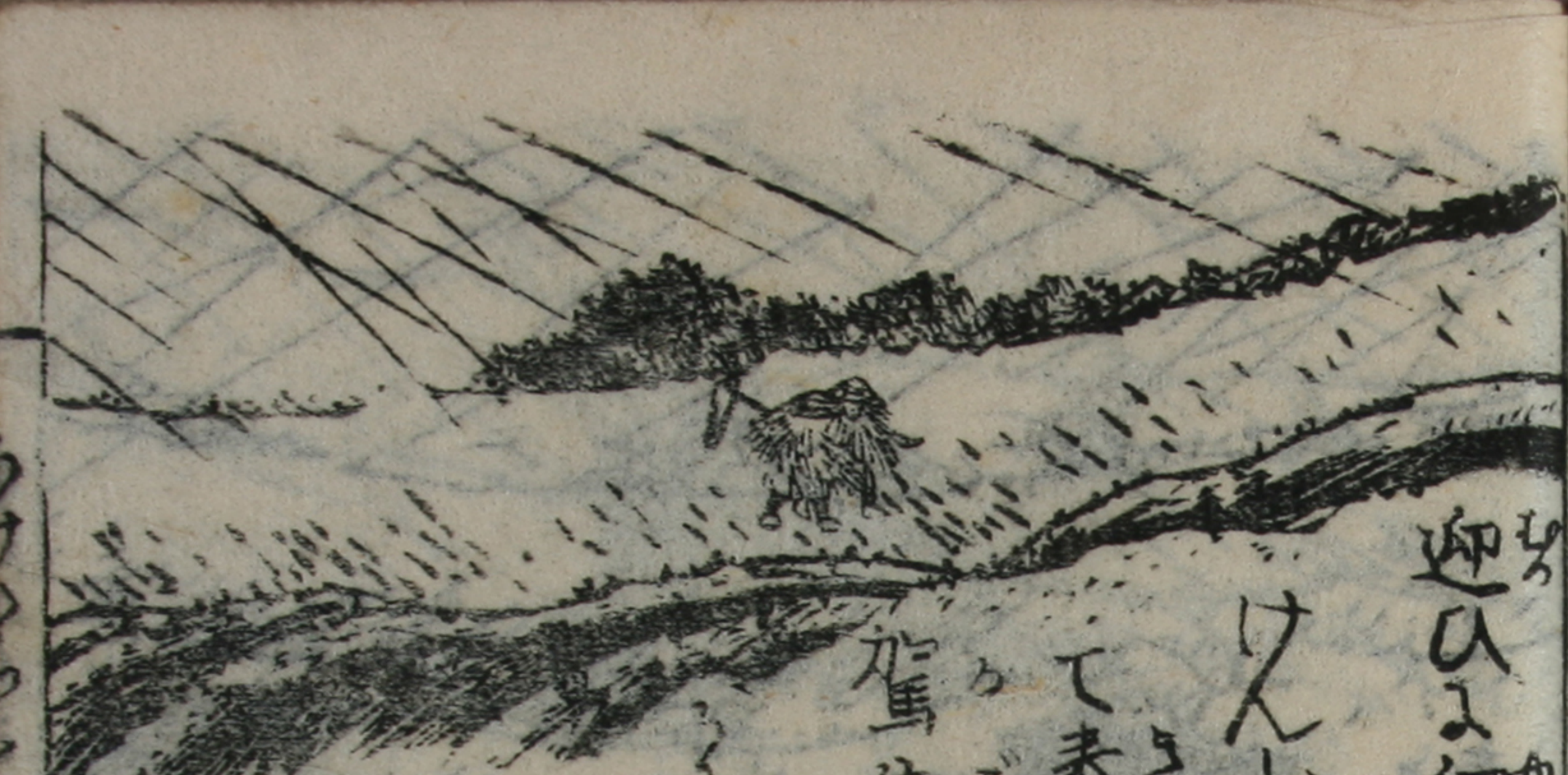
も逢てそのまゝをとるべきにや。

昔気質の野夫なれば。

と推量もてゆかしくと尋ねて来るこゝろ。

時次郎がうん辺へ。久くる。とぞ傳言をうくる。とうく。平右エ門と云老父が来く。いろ〳〵。モシ時次郎がこの里を胸やで暇ごひ。心のこりなく跡り。さと。里を胸やで暇ごひ。心のこりなく跡り。さと。里を胸やで暇ごひ。心のこりなく跡り。さと。

わうとえつくふく居らぬぞ。
ちひ切らん人今更次良
やらまぬ陰果づくと。
浦里へ里へおぢやまと吐声よ。
時
イヤまあ未会ぬ事取よせうこいふ
ゑ
声ち。是雲ゆく空の色花のごとくあるとも春の雨ぜ
端の板びさしより里の
とうとうとうとう



迎ひよ行きまと柴戸を完く門のやだ
けんど婆ア途中で傭ひー丑鴉を後よつもも
て来ろうしが關さんには
駕籠屋さえト雨止を待つ見
此所ぢやと云はつ
まへかつ八
思いやらめともも
おく里をとそ



屋うちへ入(はい)ると其(その)儘(まま)ぐつすりと寝(ね)入(いり)て居(ゐ)る。

あくる朝(あさ)目(め)をさまして見(み)ると昨夜(ゆうべ)の時次郎(ときじろう)と悪者(わるもの)が付(つき)

添(そひ)て居(ゐ)る。由断(ゆだん)をさせて仕(し)まふと思(おも)ひ

ながら。ぐつすりと寝(ね)こんだものと見(み)へ時次郎(ときじろう)も

悪者(わるもの)も何(なに)時(いつ)か出(で)て行(ゆき)ました。

時次郎(ときじろう)は大(おほ)きに驚(おどろ)き

夫(それ)と気(き)

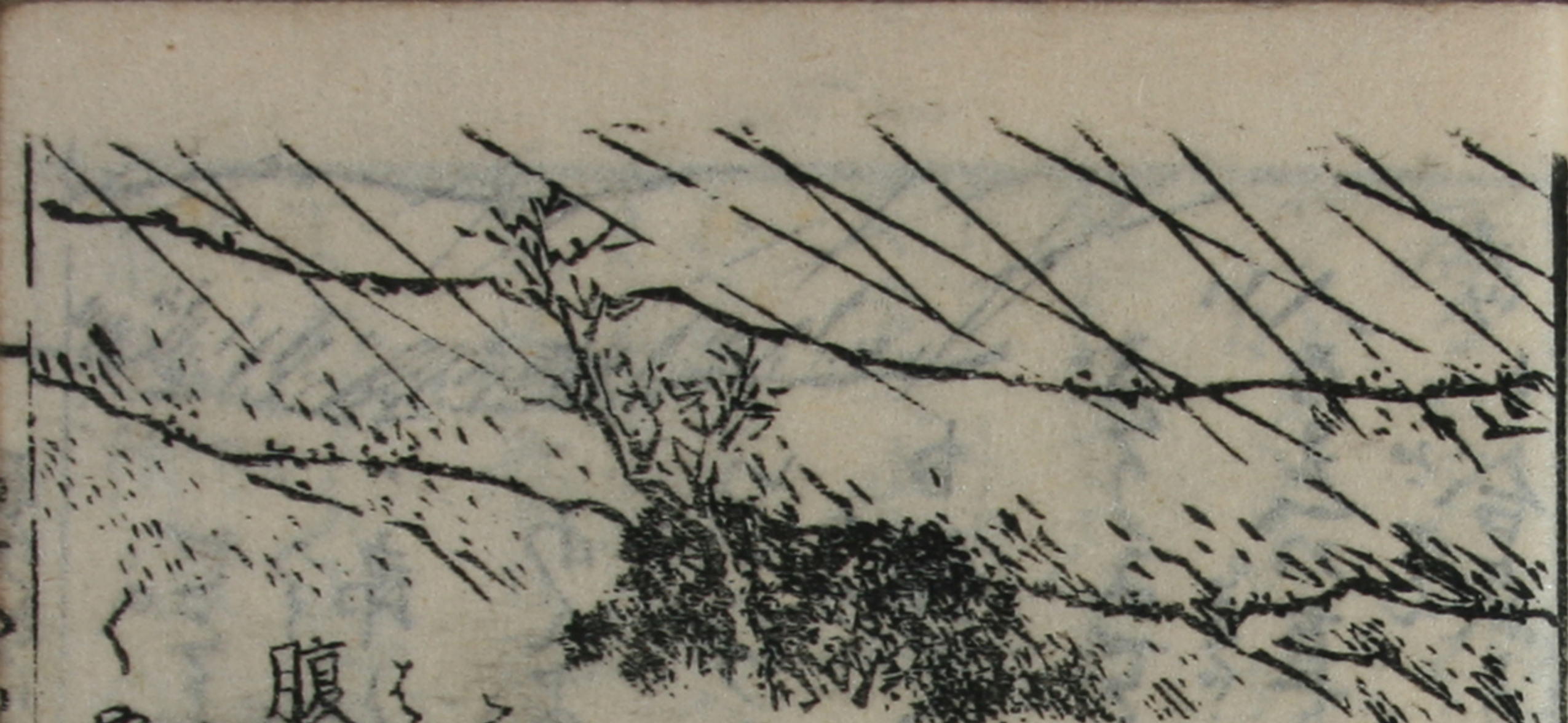
モシくよく

ゐられと

ゐる落着(おちつき)

尋(たづね)て

尋(たづね)て

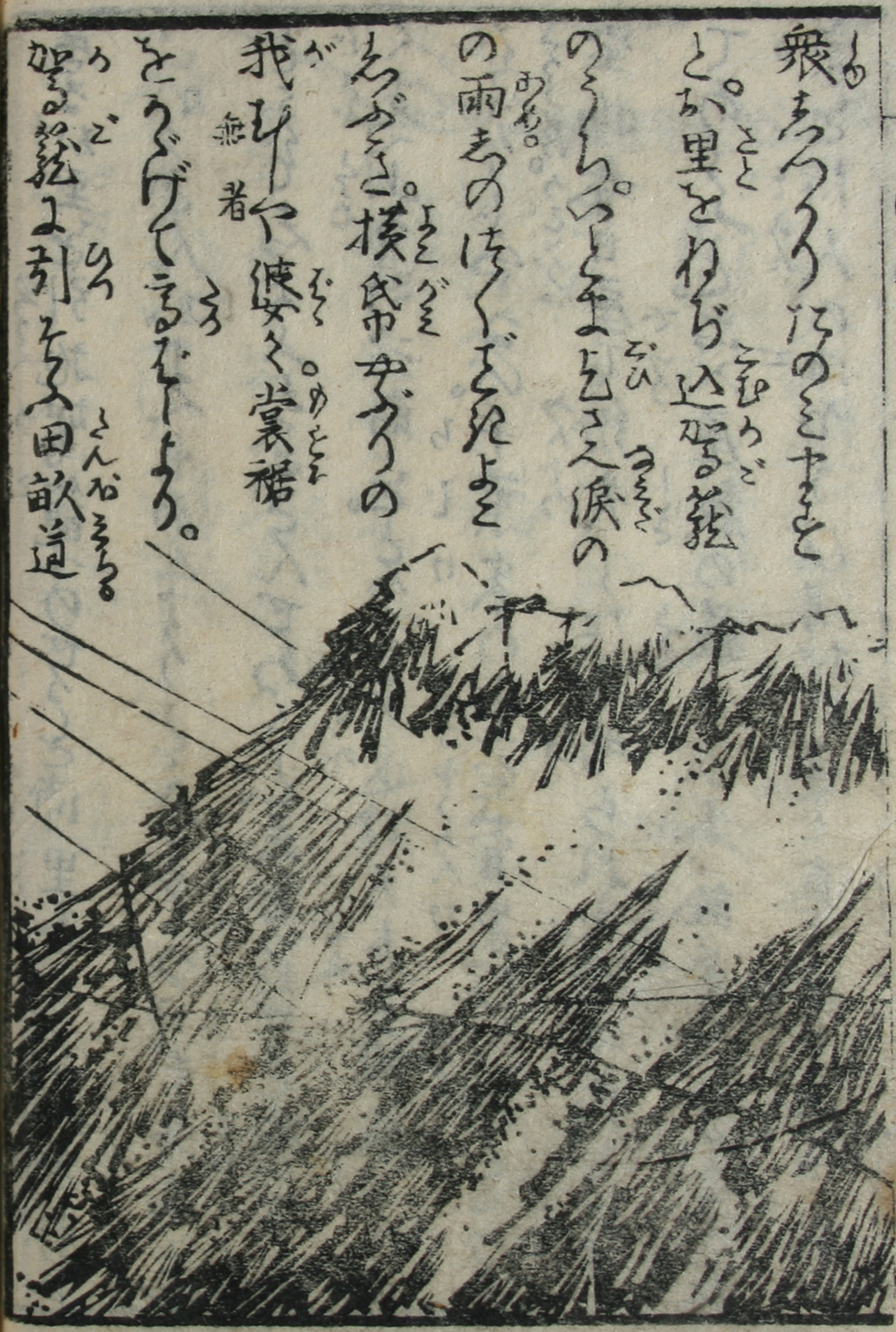


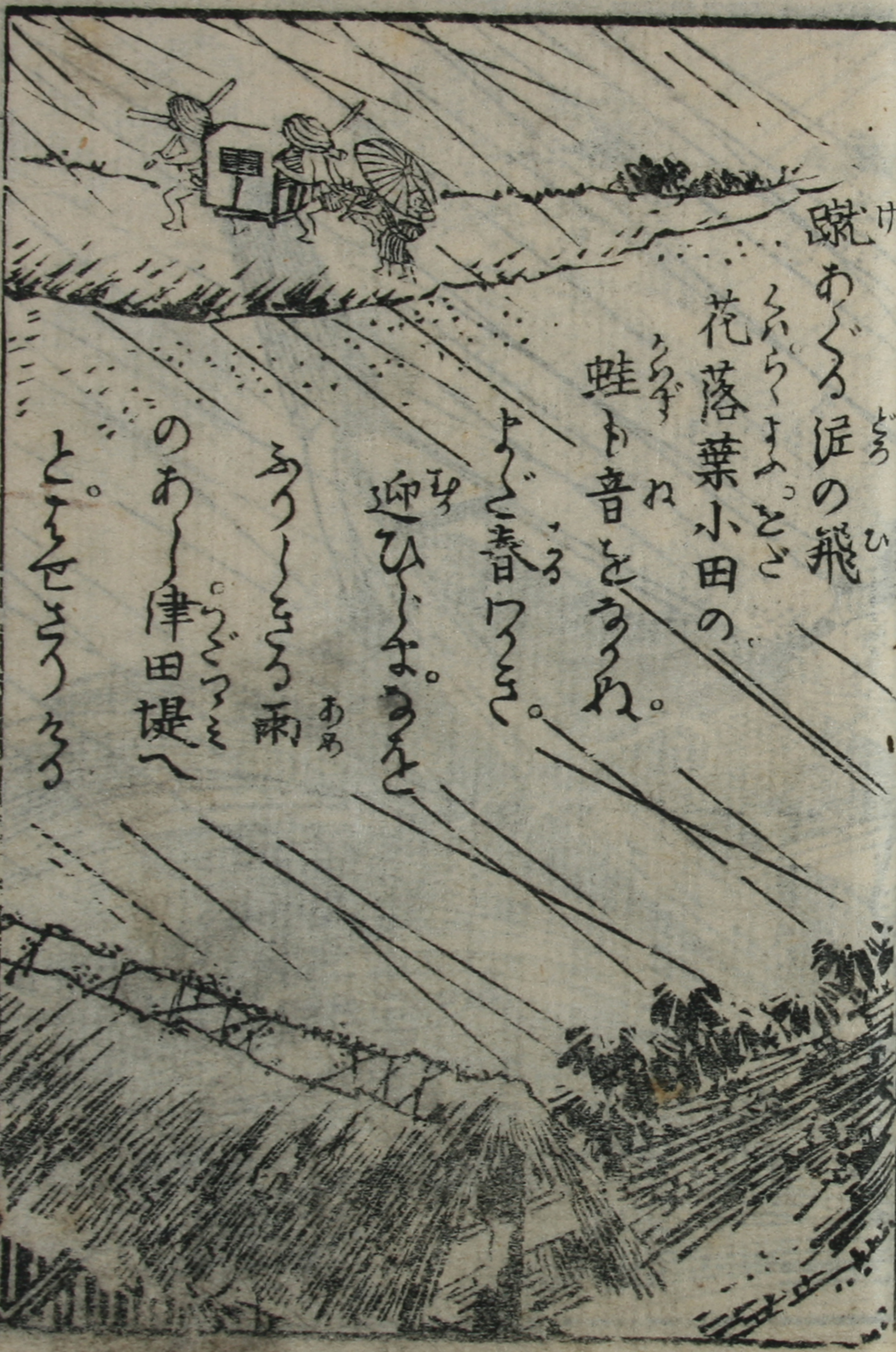
んでうくの悪くのと途方もわる人金と女とを
ひきまま
引かへてもかえ女それア親判の理ア
道をやめ。このづづく篠塚塚塚塚
あげ。山名屋うくと取あげわけとも
そわとぴ。毎日くくの六ツ半ごろ
まのまち
んぞうやが出つでりむ
あげくくの果ゐ出入場の意
腹帯のくく呼よ来うくと這入の大
くくあび
家業かまとそ老躰と親を路頭よやめハ



ぜ。そ
ろろの人ぢのひと
あんや
ろろくじ、ろろ里ぢのさと
も。真壬ぢ
ろろのーぢり其方のそのかたのような
ろろ息子むすこ
も益て
し死ぬぢまでろろ。
ろろどうみせそ
ろろふやア此方のかたの寂滅ヲイ駕籠ぢご屋さんと呼
ろろ手ぢ駕籠ぢご。ーのづ
ろろくよほうど辺四ツ手ぢ駕籠ぢご
ろろうぢ日ぢ配をとる揉組が泣

居るか里を引抱駕籠へのせると傳里を〳〵アレ〳〵無躰
に〳〵カ〳〵とぶんまはすもあんまりよくもあるまいと。
ぞうぞでまろよまろごぞごろ
でさ〳〵ふぐ
く支へ止る時次郎をとろ突退
ぢうぢうしやがつて大声よ娘を盗人
ろうろうぬ。ちぐ
宝物春日屋で紛失した大略ならば社業
であくまでうしきの厳しひ家を作人の店やうびヨウポド運
そこ
家を





古池や
蛙飛こむ水の音
芭蕉

あぐる泥の飛
ふらくまつをど
花落葉小田の
らぐれ
蛙も音をうろ
よぐ春ろ
迎ひ
あゝ雨
のあゝ津田堤へ
とそそ
ろうろ


浦里

右浦里（そぎうらざと）
内覧（だいらん）に入（いり）
昔日（むかしびと）
昔語（むかしがたり）
小糸（おいと）
佐七
花暦八笑人（はなごよみはっしょうにん）
大山（おおやま）
道中（どうちゅう）
右の後編（うしろのしりへん）
草紙（ぞうし）

船中（せんちう）の落（おち）
入（いり）後（ご）の
児女（じぢょ）
文（ふみ）
大全（たいぜん）　完（くわん）五冊　南仙笑楚満人作
第二編　全二冊
第三編　三冊　瀧亭鯉丈作
溪齋英泉画
毛後駿足（けのしりうまのあしはやし）　全三冊　そま人
田川（たがは）の花紙（はなぐも）　全二冊　うた川亀さく　亀画
虫枚（むしまくら）　二冊　雑事（ざつじ）　たき川亀さく　亀画

むさし　ぶき　ぎ
武藏へ武器の納まる名あり。
なぞ　のち　わやき　ごや　ほ　ひと
建後の居屋鋪へ出入る職人諸
あきんど　ひっこし　まち　ちょうにん　つれ　こ　まち　やど　や
商人連レて越す町は宿屋
ろ　よこちょう　ごちょう　ろ　ちょう　ろ　ちょう
呂横丁五丁呂町と云ふ。
ろ　ちょう　ろ　ちょう　ろ　ちょう　

ぜん金
盆へ今日ハ岸の狸ざ別ざ出ようきう
まぶ
まるこそんなこるロとりくよいうちあれまし
らへいとそ
かがよろ。此はん立ノ
方
さすあの
若合もの
なーぞや
酒
よいうまそ
ぜんろく
ぜん金
ぜん金
ぜん金

ト女まぐが江戸前ぐまけうこん

お噺とつつかくるの

ぞやめよんくぐちょろっぽ

なぢ仏のぞやゆうぐ

と危よ角ふらぐまぐ

てそまよめぞやぐおまへ

ぢん且おぐが其当とまんくそ

とぞひまる天ゆも地ぢ

全

今日の帳合ぢ今日の間

ぜんぶ一時ぶ全六さん

浅七

を久離切(きり)や。血筋(ちすじ)とのよそうもあまた。手(て)うがおやの家(いえ)。居跡(いのこせき)よこせくと云(いう)て人(ひと)にあるものぞ。其(その)ころころごろくとそくとそくとそ

ー
のうへの有松中まで
母のゆかた是ゟ和帯へ
結ぶ
娘ゟ早く居所
の女房
ありまつ
ありまつ
「人まぢ

まつたんなよ　ふ蒲焼酒吸もモ　全六さんもの見
ろーだえが考へろうが心がそもどろぐろ現在ろろ
ぐ叔母ちまそぐ。あんしあん思案ハちの
無駄のろ　ろ　ぜんぶの　ろぐ
叔母ちまそぐ。あの中の時次郎さんを追ひ
かけんまそぐ世間が消ます白ろ
ろぐ大ぐ。
ろ

家よ。ろぐ
叔母がろう故ふ後脂さ
ろぐろものぞそ
ろぐろぐなの顔
ゆゆ若且那の勘當もえかとろ
逃ろ

あるまうちの
のくが唯(ゆい)えぢ
こうりはぢ
もち条(でう)
持の虫(むし)のえぐう
の蚘當(むしあた)くる。
と。
支(さ)んき病(やまひ)
さまをれば叔母(おば)が悪(あく)ねん
消(き)えくく八方(はつぽう)
九(まる)く納(おさ)まるそ

其(そのもん)女(な)をもらひ
宴(えん)
ままし
たそう。
の。お嘸(さぞ)
さんの病(びやうき)
も若(わか)旦那(だんな)
帰(かへ)条(でう)
ぢ
ぐ
脚(あし)
ぐりまわそ
ん
の心(こゝろ)
ぢ
ぐ
引(ひく)
こぢ(こゝろ)
ぐ
五拾(ごじう)
百(ひやく)の端金(はきん)

モシ〳〵ゐん臨時がまつたくゆるを引のぞきこんで
つく〳〵ハ碧日ゆふべ
ろ〳〵ぜんる居且那のどさん
ぜん〳〵全六へりく帰ふ
うん〳〵昔へうるのくそ
まゝの心のとろ
ぶんこゝろ
人へ大切よ。
深ん切なコヤお出入

引受ケ居ル支配人此金六ヶ敷及ダメ。ト、
右ノ通リ申ス迄モ無ク成行カマヽ
又ハ人ノ家ヲ出テ
ユヤ中ヽ
糠ガ有ル。
包マヽ
お前ハ其金ヲ持ヽ



大日本国利根川

びわ
五井お照さんの里ぢや見(これ)へ
ところ
不書(かゝ)くくのそ
びゞろきん
まづ五十金(ごじつきん)
のまゝおうそくしや彼(まゝ)
らうにん
の浪人中(ぐみ)
そ
勘當(かんだう)
のこ
日(ひ)も
えうくんの帰(かへ)
一(ひと)
こんふとゝ

ふく。おまつ。おまつ。おまつ。今乃泳切が其時
こうろ。そ。ま。ま。ま

あかぢ

番頭（ばんがしら）
主人（しゅじん）へ忠義（ちうぎ）
今（いま）
まゐせう〳〵くんしんおやく。そんちやう彼（ぎ）道具（だうぐ）
デキ
をつゝ
ありまえ
くん
同（おな）じや。エヽ合（あは）せ申（まを）さぬと。エヽ合（あは）せ申（まを）さぬと。エヽ合（あは）せ申（まを）さぬと。其（その）
る
形（なり）で旅（たび）
不出来（ふでき）
取揚（とりあげ）がある
落付（おちつ）くもの
ぢや
あま
ござ
うた
ぢ
ぎんあた
ぎ
ぎ
ぎ

呑込(のみこん)でおるさうな。夜明(あけ)ても
向(むかう)の方角(ほうがく)ばかり
コレ〳〵落(おち)ついて
浅(あさ)
一(いち)のそばにあまり
る居(い)るも疎(きみ)持(もち)悪(わる)い。早(はや)く帰(かへ)
そうしやうひやうしもなく
なふらのよふ
全(ぜん)
翌日(あくじつ)の朝(あさ)。地(ぢ)
獄谷(ごくだに)のくも紙(がみ)
八(はち)ツアゝ高麗(こうらい)
屋(や)ぶけうくん

追(おつ)かけて
心(こころ)あてに
行(あと)
落(おち)
浅(あさ)
久(ひさ)
帰(かへ)
全(ぜん)
浅(あさ)
跡(あと)
地(ぢ)
獄(ごく)
谷(だに)
紙(がみ)
屋(や)
ぶけうくん

さあ伐七ツ
あゞ長く
らう郎め
そそふ。
ぎーち伐七ツ
ぎーち美七ツ
をも労ふ
百両の。

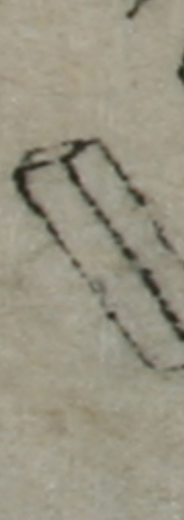
へい行跡尤く金六ツ。
久帰り
敵と知れ
とゞ吾の。下り
食ふそう
ふもおよ
とき有りめへ
ん曲。
此毒茶
やま
平ナへ
違ー

尤く自滅
なの古え
者ども
よくの
ようあり
ちの。
塚だ

とその也。時を打ぐるくる
ふとい出て夜泳よたる也。其剰円
の悪物と調子合せる
の鬼五十両で宝
がらその孫だ戸一ト枝り
たあいさ犬ねまのの。
きまへ婆ア
あとぐ

丸くまるとある百両
もてそうわ
又廿春日屋のあるじ
ちもぐ血筋の種切レ
いちぐ一軸ふんだるも時
葉家の頭り
無理隠居
お照と

失念てゐる拍子を。奇妙と下女がげゞ返ス。さう〳〵心爰にあらずと見へたり。イヨ春日屋の若旦那。てゞ獨りゐるぞ。イヤ〳〵。そのまゝ〳〵。下女〳〵。モシ〳〵。ソレ私ゐりの久振返り。ア、旨イ。味イ。味イ。



金コン

ア、

廻る舞葉葉八正面三間がぐり。五回目春日屋の段なり。

あげまきのまゝより丸髷の巻まで。

明烏後正夢二の巻

尾